

にじのへやだより

令和7年9月発行 (vol.3)

病児保育室にじのへや

蕨市病児・病後児保育事業

今年の夏は、記録的猛暑が続いたかと思えば、線状降水帯の影響で急な豪雨や雷雨で不安定な天気と蒸し暑さが続きましたね。

各園、施設で流行している感染症が異なり、様々な病名(通称:夏風邪)の感染が報告されています。夏風邪は夏特有の感染症を一括りしたもので、病院で視診や問診、検査結果等でわかりやすい症状が出ていれば病名が付きますが、通常の風邪と変わらない症状の場合は検査せず、夏風邪と診断されることが多いです。にじのへやでは、病院に記入していただく利用連絡書に病名の記入欄がありますので、通園・通学している園、施設で流行っている病名をお伝えしたり、可能であれば検査をお願いしたり等、具体的な病名を書いていただけるようお医者様にお願いしていただけると助かります。

まだまだ厳しい暑さが続いていますので、こまめな水分補給、規則正しい生活を心掛け、残暑を乗り切りましょう。

利用児童の疾患

1.上気道炎	39名
2.胃腸炎	8名
3.気管支炎	5名
4.流行性角結膜炎	3名
5.咽頭炎	3名
6.RSウイルス	2名
7.溶連菌	1名
8.急性ウイルス感染症	1名



7月<年齢別利用内訳>計 36 (名) / 登録者数9 (名)

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	学童
0	12	1	7	1	5	3	7



8月<年齢別利用内訳>計 26 (名) / 登録者数7 (名)

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	学童
0	9	11	4	0	1	0	1

7、8月は、胃腸炎や上気道炎のお子さまが多くご利用されていました。熱が高めのお子さまや嘔吐・下痢のお子さまが多かったため、こまめに体温を計り、体調や月齢に応じて個々のペースを大切にしながらゆっくり食事をしたり、横になって十分に休息がとれるように見守りました。

初めてご予約される方にも安心してご利用していただけるよう、お子さまのご家庭での体調や様子を丁寧に伺い、好きな遊びを楽しみつつ、休息をとりながらゆったりと過ごせる環境を整えています。

保育の様子



にじのへやでは様々な玩具が揃っていますので、好きな玩具を見つけて自分のペースでゆったりと遊ぶことができます。

お家で作ったお弁当や食欲がないときはゼリーやバナナ等、食べやすい物を持ってきていただき、無理のないようゆっくり食事を取ります。



身体を休めるため、午睡時間を長めに取り、静かな空間と適度な暗さ、心地よい自然の音楽で安静に眠れるような環境づくりをしています。

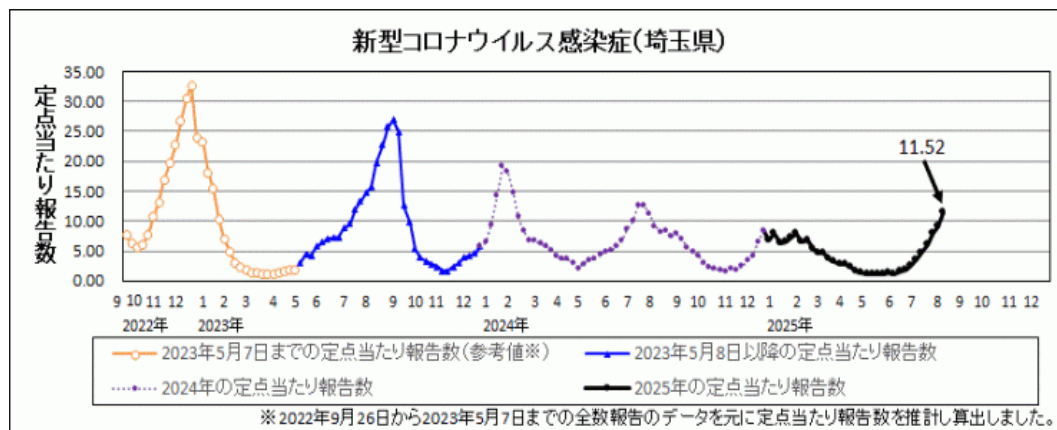
新型コロナウイルス感染症が流行しています



例年、夏と冬に流行している新型コロナウイルス感染症ですが、今夏も9週連続で増加しています。

新型コロナウイルス感染症の新規感染者は、8月17日までの1週間で2万2288人で、全国における1医療機関あたりの患者数は6.30人です。埼玉県は11.52人で、これは、全都道府県で3番目に多い人数です。(1位:宮崎県 2位:鹿児島県)

現在流行しているのは通称「ニンバス」株で、「カミソリを飲み込んだかのような強烈ななどの痛み」が特徴です。他には「発熱」や「咳」などの風邪症状も出ます。連日の猛暑で、エアコン使用により閉め切った部屋で過ごしたり、暑さでマスクをつけづらいこと等が流行の原因と言われています。熱中症の危険性もありますので、常時マスクをつけることは難しいと思います。手洗い・うがいをしっかり行うことや、エアコン使用中でも数分間でいいので換気を行い、新型コロナウイルス感染症を予防しましょう。



参考 URL: <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0714/surveillance/covid-19teiten2.html>

百日咳の流行も続いています

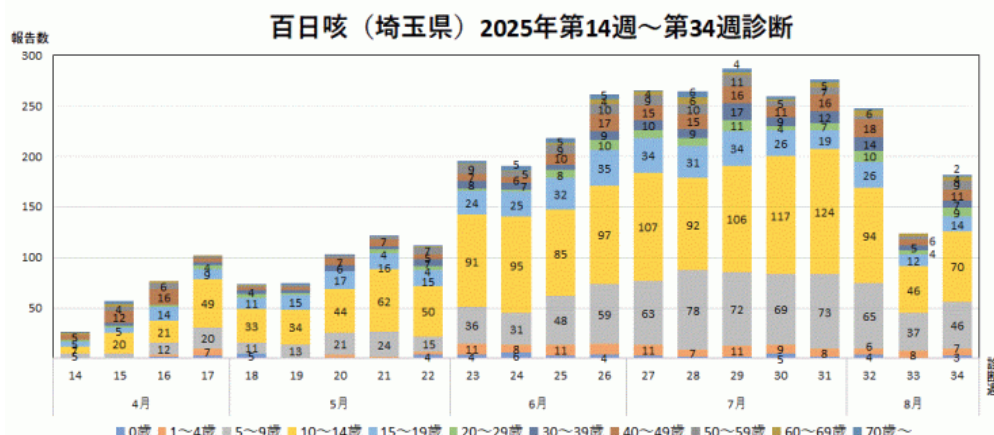
けいれん性の激しいせきがでる「百日咳(せき)」の流行も6月頃から続いています。今年の百日咳の全国累積報告数は、6月末までに既に昨年1年間の報告数の8倍を超えています。7月をピークに減少傾向にはありますが、8月24日までの1週間で診断された患者数は埼玉県では182人で、都道府県別では東京に次いで2番目に多いです。

県内の百日咳患者の年齢別の割合は、10~14歳が全体の約38%と最も多く、次いで5~9歳(約25%)、15~19歳(約8%)の順でした。患者全体の7割を、14歳までの子どもが占めていることになります。

百日咳は、乳児(特に新生児や乳児期早期)では重症になり、生命に危険が及ぶ場合があります。

百日咳には予防接種があり、生後2ヵ月から公費(定期接種)でうつことができます。(5種混合ワクチン等)

ワクチンの効果は4~12年程度で低下してしまうため、現在のような流行時期は、小学校入学前後での追加接種や、11~12歳でのワクチン接種が推奨されます。前述したように、乳児が百日咳に罹患すると重症化することがあるので、乳児がいる家族(または、出産予定の家族)は百日咳含有ワクチンの追加接種で免疫を付けることをおすすめします。予防接種以外にも、咳エチケットや外出後の手洗いとともに、十分な休養をとるよう心がけ、体調がすぐれない時は、早めに受診するようにしましょう。



参考 URL: <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0714/surveillance/srv-week2534.html>